



2013 全生研第55回京都大会 全体計画（第8案）

2012/9/17 第1回京都大会実行委員会
提案：京生研常任委員会（文責：瀧本）

はじめに

2013年、全生研第35回京都大会からちょうど20年後の節目の年に、私たち京生研は、再びこの地で大会を引き受けようとしている。

この間、教育に関わる政治・経済・文化情勢はめまぐるしく変転してきた。ただ、それらが子どもたちの発達を阻害し私たちの実践を蹂躪する方向に加速されてきたという点では、一貫している。

そんな中で、私たち京生研はどう歩んできたか。上記の外在的条件は省き、私たちの主体的条件をその研究面・組織面から概観したい。

第35回大会を終えた翌年の1994年度、私たちはそれまでの全国大会に京都から提出された33本のレポートを全て分析・総括した。そしてそこから課題を抱えた子どもへの「共感・共闘・共生」による個人指導と集団指導の統一というテーマを、初めての本格的な基調提案として打ち出した。

以来18年間、京生研は、このテーマを実践化する「重い課題を抱えた子どもを軸とする集団づくり」を愚直なまでに追求しつづけてきた。そして、その研究・実践を機関誌『Kの世界』として、これまた愚直に持続してきた（「K」には多様な意味を込めているが、Kadaiを抱えたKodomoとKyoshiとのKyodoの頭文字はその中心である）。めまぐるしい情勢変転の中でも、重い課題を抱えた子どもは常に存在しつづけたし、少数（意見）の尊重こそが民主主義の要諦だと確信してきたからである。

35回大会は京生研の組織強化という点からも、一つのエポックであった。

1974年、京都市内を中心に府下に1、2のサークルが点在するというささやかなスタートを切った全生研京都支部は、81年広島大会の最終日、府下のサークル代表と全国委員の12名により、京都支部として初めての活動方針案を作成し、翌82年滋賀大会時の支部総会でこれを承認、京生研としての組織的確立を目指すことになる。ちなみに滋賀大会の京都からの参加者は506名であったが、この年度の会員数は128名にとどまった。大会参加者と会員数の落差が、この当時の京生研の実情をよく示している。

1983年12月第1回合宿研。93名参加。予定講師の中央常任が突然キャンセルになり、4本のレポート分析のみによって合宿研を乗り切った。顧みれば、これはこのときの京生研の象徴的な出来事である。京生研はそれまで全生研京都支部という全生研の「子ども」であった。名だたる全生研中央常任の実践や言説の権威に従属していた。しかし、この合宿研を境に中央常任委員（会）を相対化するという主体性を意識し始めたのである。

同時に、35回大会までの課題は「組織性」の確立であった。それは具体的には「京都で全国大会を開催できるだけの組織的力をつける」ことであった。そのためには実務能力の強化は不可欠だった。京生研常任委員会も未確立だった。一言すれば、京生研は、まだ「サークル連合体」の次元にとどまっていた。

しかし、その後、毎年の合宿研や1989年から始めた京生研大会、そのための常任委員会の指導性の強化を通して、93年京都大会を開催できるまでの力量を充填していった。

93年京都大会の現地実行委員会スローガンとして私たちは「重厚長大」を掲げた。

これは、その数年前から全生研の主流となり始めた「ゆるやかな集団づくり」「集団づくりの新しい展開」に戸惑いを感じつつ、その新しい流れの社会的底流であった「軽薄短小」志向に対置する意図を込めていた。京生研としての主体性の表現でもあった。

大会を契機に、私たちは、それまで未熟であった研究的側面の強化に向かう。その表れが前述の94年以降の独自の基調提案作成であり、研究的機関誌『Kの世界』の年間4回発行である。それは同時に常任委員会の確立を伴うことになる。

これらを基本的に支えてきたのは、言うまでもなく府下各地域サークルの日常活動である。40年ほど前の「京都市内を中心に府下に1、2のサークルが点在する」状態から、今や府下全域にサークルは存在するまでになった。この間には「開店休業」になったサークルもあるが、近年、世代交代を図りつつ「新装開店」し、

旺盛な活動を展開しているサークルもある。

前回大会後18年間の研究と実践の蓄積は、まさに「重厚」なものである。それは一言すれば「重い課題を抱えた子どもを軸とする集団づくり」の研究と実践の蓄積と言えるが、この研究・実践を貫くためには、このテーマこそが真に民主的な社会を実現する道だという確信が必要である。そして、この確信は、歴史の進歩性と世界の民衆のちからに依拠するという「長大」な見通しに支えられている。

全生研第55回全国大会京都開催にあたって、私たちは、かつての「重厚長大」を上記のように再定義した上で、これを基底において持続しながらも、私たちを取りまく教育情勢、その中で大会開催の意義を明らかにし、新たな課題に向かっていく必要がある。

小野田正利氏(阪大大学院教授)はアメリカブッシュ政権で成立した「落ちこぼれゼロ法(No Child Left Behind Act=NCLB法)の内容と比較して、「大阪の教育基本条例案は、この法律も参考にされているように思われる」と指摘した上で次のように述べている。

「公教育が荒廃させられ、民間企業のビジネスの草刈り場となっている様子が、もの見事に明らかにされている。学力テストによる学校間教師間競争、そのための不正や腐敗の横行、高くない教師の地位と給与にくわえて急増する教師の早期退職、安定しない学校と劣悪な環境に置かれる生徒たち、大競争の中に巻き込まれた親たちからの不満が学校にクレームとなって押し寄せ、さらなる教師のモチベーションの低下、といった悪循環ともいえる状況の中で、公教育と学校バッシングによって、最後には、本来は公的サービスとして提供されるべきはずの公教育に、民間企業が投資目的で入り込み、食べ物にしていくという事実。これは対岸の火事ではない。他山の石とも言うべきもので、3年後の大阪の、そして5年後の日本のあちこちの実態になるかも知れない。」(『内外教育』2011年10月11日 「普通の教師が生きる学校:堤未果『社会の真実の見つけ方』」)

子どもたちと教師に対し「非寛容」と排除の傾向が過酷に強化される教育現場では、「Kの世界」の共有を実践の軸に据え、そのような実践仲間を広げることの必要性がますます強まっている。とりわけ今、「もっとも苦しい立場に置かれている仲間を軸とする職場集団づくり」と「『K』を軸とする学級集団づくり・学校づくり」の重層的展開が、京生研の追求テーマ(少数者の側に立つ、抑圧される人の側に立つ、民主主義をラディカル＝根源的に追求する)の必然的帰結として要請されているのではないか。「愚直」とは、愚かと思えるほどに真っ正直なことであり、最も素朴なる正義心なのである。

私たち現地実行委員会がこの大会のスローガンに掲げるのは、

「Kの世界を生きる～競争から共生へ～」

である。「K」という文字に私たちは自分たちが教育実践を進めるときに最も大切にしてきたたくさんの方のことを重ね合わせて来た。もっとも重い課題を持つ子を大切にしたい実践を追求し、彼らと共に感・共闘・共生できる世界を追い求める私たちの「不易流行」の精神である。



新たな課題に挑む原動力には、京生研の歴史をつぶさに見つめ、その中で歴史そのものを作ってきたベテラン実践家の哲学と実践の力量はもちろん、これからの全生研を創っていく若い仲間のエネルギーと斬新なアイデア・行動力こそが求められている。大会の企画運営に立ち向かう中で培われる組織的／個人的なちからが、全生研／京生研の明日の灯となる、ひいては日々の実践に誠実に向き合う全国の教職員に、希望と勇気をもたらす大会となる、そう確信する。

この大会では、二つの新たな試みを導入する。

一つは、第54回全国大会総会で決定された全生研組織改革の「基本的な方針3」で述べられている、全国大会での開催支部と常任委員会との共同である。「支部が大会運営の企画段階から中央と共に中心を担い、大会全体のデザイン、そして基調報告を提案する」という新しいスタイルを追求していきたい。

常任委員会がまとめ上げる基調提案。それに大会開催地区の現状を分析し方針を立てて実践したものをまとめ上げた「基調報告」。基調報告の学習が、明日からの参加者の実践にリアルな勇気や見通しを与える、そういう基調報告学習を今まで以上に目指す。

今一つは、高生研全国大会とのコラボレーションである。

2011年3月、京都市内において高生研近畿ブロックと全生研近畿全国委員連絡協議会が共催で「高生研 & 全生研 KINKI 教育ゼミナール2011 in Kyoto」を開催した。双方の奮闘で、ここに200名の参加を組織し、全生研と高生研との共同という新たなスタイルが一つの形として成功した。今後も様々な形で民主教育の一翼を担うため共同していこうという合意もそこでなされた。

そして2013年京都大会と同日程で、高生研が京都で全国大会を開催することが判った。すぐに連絡を取り合い、「双方が互いの分科会への交流を図れる大会」というスタイルの全国大会をめざすことを双方で合意した。

全生研と高生研。双方とも日本の民主教育に長年にわたって大きく貢献してきた民間研究団体であるという自負を持っている。しかし、会員の高齢化、若年層会員の減少などの近年の組織的危機状況は双方共に年々厳しくなり、今後の活動のあり方を大胆に見直しながら活動することが強く求められている。本大会は、その打開のために大きな足がかりとなる大会にすべく、現在合同の会議を開き、どの部分でコラボレーションが可能か、検討を重ねている。

全生研全国大会は20年の年月を経て、組織としての大きな成長を遂げ、確かな足取りで京都の地へ戻ってきたのではない。団塊世代会員の一斉大量退職とそれに伴う会員数減という組織的弱体化、機関誌発行減による出版形態のあり方変更など、大きな困難を迎えているのが全生研の現状である。現地としては「組織としての存亡のかかった大会」という危機感を持って運営にあたりたい。そして、「再び」ではなく、「新たに」全生研という組織を作り直す原動力に、我々京都の仲間になっていくのだという気概をもって大会を作っていく。そう心を奮い立たせて準備にあたっていきたい。

1:2013京都大会開催の意義

現地実行委員会のスローガン

「Kの世界を生きる～競争から共生へ～」

1) 日本の生活指導運動の発展のために

- *今日の教育情勢にあって全生研の生活指導運動が閉塞的な情勢を切り拓けることに確信をもち、教育運動の未来をつくりだす。
- *「非寛容」の指導と、その実現のために教師に要求される「管理主義」を乗り越える確かなすじみちを示す優れた教育実践を旺盛に交流し、全国の仲間の光とする。
- *近畿ブロックでの共同開催、高生研とのコラボレーションという新しい大会運営のあり方を追究する。
 - ①会員減少と会員構成の激変の中にある全生研に、新たな展望を示しうる大会。
 - ②高生研とコラボレーションすることで、民間研の困難な状況を克服し、新たな活動の在り方を提起する。

2) 京都の生活指導運動の発展のために

- *くらしと教育、環境を守る民衆運動など京都の魅力を全国に発信する。

民主教育の発展を願う教職員組合をはじめとするすべての団体や保護者・地域と連帯し、全生研の生活指導運動への理解と共感を広げていく大会

3) 京生研のさらなる発展のために

①これからの京生研の課題

ア・「課題を抱えた子に取り組み集団づくり」をいっそう意識した実践の展開と、その理論

化。とりわけ個人指導と集団指導の統一についての理論化。

イ・10年後に中核となり得る若い実践家を増やし、育てること。

ウ・それらを軸に、30～20代会員の『量的拡大』をつくり出すこと。

エ・拡大に必要な自覚と実務性を確立すること。

オ・民間研・組合教研に自覚的に参加すること。

②大会開催でどんな力を身につけていくのか。

ア・一人ではできない。仲間の知とちからを有機的に結集していく「組織性」

イ・いい加減ではやりきれない。仕事をきちんとやりきる「実務性」

ウ・文化的質の高い諸集會を創りあげていく「文化性」

エ・多くの仲間を開いていく大会をめざしていく「大衆性」

オ・実践によって困難を切り開いていく「進取性」

2: 京都大会の目標・方針

1) 目標

①全国から1000名の仲間を結集し、ここ数年の全国大会の沈滞を打破し、反転攻勢していく契機とする。

②滋賀大会でのKINKIのちからの結集を大きな教訓にし、近畿ブロック全体の支援を受けて実務にあたる。その中で、実行委員会には200名以上の仲間を組織し、組織としての結束と実務能力の向上をめざす。大会を引き受ける中で、若い教師たちの真の教育要求と出会い、教育実践上の困難を出し合い、世代間共同を広げる。

③京都で開催する独自性・文化性・話題性を最大に引き出した大会にする。

2) 方針

①ますます大きな宣伝活動と支部間の共同により、近畿から600名！！うち京都から300名、大阪から150名、滋賀から50名、兵庫、奈良、和歌山から100名を組織する。現地から全生研常任委員（会）や各支部全国委員（会）に今まで以上の最大限の努力を強く要請する。

②大会をやることによって現地や「KINKI」の力量を高めていく。「大会の翌年度には会員数が減ってしまう『お祭り』」的なものではなく、活動の積み重ねが個々の会員に「力量」となって定着するよ
うな準備をめざす。

③2012年4月以降でリレー学習会を発足させ、京都の会員拡大と実行委員会組織化を追求する。

④諸集會、特に開・閉会セレモニーには、全国に誇りうる高い文化性を持った発表を創りあげる。

